

春のあらし



赤江麦乃

窓の外に菜の花畑が広がっている。左手の住宅側に休耕田。右手の奥には桑畑が続いている。

年老いた農夫が、桑の若木を全身が「く」の字になるほど背負い、ゆっくりと農道を歩いてゆく。農夫は、農道の端で止まると上体を少し起し、合掌し深く頭を下げた。いつもの農夫の儀礼であった。再び上体を起すと、農道を左折し歩き出した。行く手には、深緑色の防風林にかこまれた茅葺きの農家がひっそりと建っていた。

農夫が合掌した眼前に紫紺に染まった阿武隈山地がそびえ、ふもとの栗山町の中心部に、商家や住宅の瓦屋根が幾重にも連っている。

江戸時代の城跡の名残りの公園には、染井吉野の桜が、最後の生命を誇らしげに咲き誇り、人々をいとおしむように全身全霊をかけて包み込んでいた。

のどかな風景であった。朝陽を受けて、今にも桜の香りが漂ってきそうな気配であった。

背中ではポコッ、ポコッと音がした。麻子は振り返り我にかえた。子ども達と職員六十人分の朝食後の食器類を洗い終え、煮沸釜に入れておいたのである。煮えたぎった湯は十分な殺菌効果となるが、取り出す時は要注意だ。気を抜くと大火傷をする。超厚手綿手袋に更に厚手ゴム手袋をして、慎重に食器の入った金網籠をステンレスの配膳台に移した。

食器と食器の間から熱湯が勢いよく流れ出し、配膳台をすべり落ちていった。小皿を手早く重ね戸棚の定位置に戻した。茶碗、箸、皿、小鉢、椀、おひつ、鍋、まだまだある。大小のボール、包丁、へら、おたま、まな板、汁用大鍋、飯炊き釜、ふきん……すべてを使用前の位置に置きながら、つい一時間半ほど前、配膳前の食堂カウンターでの和則との会話を思い出していた。

「テーブルふいたよ、ごはんまだかい？」

「待って、あと五分」

麻子は主菜の焼魚を六十枚の皿に取り分けていた。幼児さん、小学低学年、中学年、高学年、中学生、高校生、子ども達の顔を浮べながら、各々が完食できるように盛りつけて、漏れがないか確認した。

「鐘ならしいいかい」

「はい、オツケーです」

朝食が待ちきれず、鼻をひくひくさせていた和則は走って食堂の入口に向った。棚に置いてある鐘を——カラン、カラン——と鳴らす。すると、あつという間に入口は子ども達であふれ、怒涛のごとく、入口から中へ中へと流れ込んできた。先程まで静かだった食堂は、子ども達の熱気であふれた。

和則が五つのテーブルの前に立って手を組むと、落着きなく騒ついていた子ども達が沈黙した。食前の祈りであった。

「天のお父さま。いつも私達に温かい食事をありがとうございます。風邪で休んでいる千加子が、早く良くなりますようにお祈りします。アーメン」

どんな餓鬼大将も食前の祈りは照れながら真面目に祈る。和則が着席して「いただきます」を言うのを待つ。今か今かとじっと待つ。そして食事が始まるが、その食事の早いこと、早いこと。何しろの成長期の子ども達だ。食べることが商売、と言っても過言ではない。

麻子の仕事は児童養護施設希望のぞみの園の栄養士として、入所している子ども達の食事と栄養指導・管理である。希望の園には、幼児から高校生の三歳の百合から十八歳の健二まで、男女合わせて五十名の子ども達が生かしていた。勤めて二年目になるが、今では子ども達の好き嫌い、食事と栄養状態をすべて把握している。彼女は目覚し時計を三つ用意して五時半からの早朝勤務に備え、職員の分も加えた六十食分を一人で作り、ようやくその後片付けを終えたところであった。

食堂の隅からオルガンの音が響いてきた。クリスチャンの丸田であった。丸田は、子ども達が登校すると、食堂へ来てオルガンを弾くのが日課であった。最初はいつも賛美歌五二七番だが、いつもと違い音色が弱い。今日は、月曜日。職員会の司会は丸田だ。ホームで何かあったのかしらと麻子は思った。丸田はオルガンを弾くことで修練を積んでいる。一方、栄養士の麻子は子ども達が健康で豊かな気持ちになり、

安心して生活できるようおいしい食事を作るのが自分の仕事だと自負していた。

——わが喜び、わが望み、わがいのちの主よ、ひるたたえ、よるうたいて、なお、足らぬをおもう——

子ども達の悲しみ、苦しみ。それを理解し共に生活する職員達も、また職員の立場で悲しみ、苦しんでいる。麻子は丸田のオルガンに合わせ、小さく歌いながら厨房を後にした。

事務室のある管理棟の前まで来ると、蔦のからまる門柱の陰から男が顔を覗かせていた。作業服姿の見知らぬ男であった。麻子の姿に男は足早に近付いてきて、両手に抱えていた大房のバナナを差し出した。麻子は、男の突然の行為に驚きながらも挨拶した。

「おはようございます」

明るい麻子の声が周囲に響き、男は戸惑い気味な様子で身を引いた。

「子どもがお世話になってます」

低音のよく通る声だった。

子ども？ そういえば、近所の幼児達が時々遊びに来ている。四歳の加代と一郎。希望の園の道を隔てた前のアパートに住むえーちゃん。加代と一郎の両親とえーちゃんの母親は知っているが、えーちゃんの父親には会ったことなかった。

「えーちゃんのお父さんですか」

「えいじの父です」

男は麻子を探るようにじっと見つめ答えた。

「そうでしたか。でも、えーちゃんには特に何もしていません。来ていただけだけでも歓迎しているのですよ」

えーちゃんは、名前を尋ねると「えーちゃん」と答えるだけで、他の子ども達の中に入り遊ぶということがなかった。なおも声をかけると、帰ってしまうことが常であった。

男は再びバナナを差し出した。

「そんな気を遣っていたただかなくて良いのです」

「いいんだ」

男はなおもバナナを麻子に押しつけた。

「もらってやってよ」

強引な押し殺すような言葉の中に、何かしら必死なものを麻子は感じた。

ふと視線を感じてアパートの方角を見ると、一階の部屋の戸口で、女が笑顔で頭を下げた。えーちゃんの母親であった。思わず会釈を返すと、男はこの時とばかり、バナナを麻子の手の中に押し込んだ。そして、きびすを返して急ぎ足で門柱を抜けた。慌てて追いかけようとした麻子の視界に、手を振る母親の姿が入った。どうか貰って下さい、という仕種であった。

男はアパートの方へは振り返ることなく、町へと続く坂道へ去って行った。母親は男の後姿を見送ると、麻子に向かって丁寧な頭を下げ、戸を閉めた。

——なんででしょう——、麻子は自嘲気味に呟いて手元のバナナを改めて見た。それにしても見事なバナナだ。百八十度を開いた大房のバナナは、傷もなく、こっくりとしてこれから食べ頃だ。この町では、これほどのバナナを見かけることはない。きっと郡山か福島あたりで購入したのではないかと思った。麻子はいつの間にか食材に苦心する栄養士に戻っていた。

——せっかくだから、今日のおやつにしましょう——。足取りも軽やかに、会議が開かれる園長室へとバナナを運んだ。

## 二、職員会

希望の園は、食堂を中心に建物が放射状に建っていた。門柱脇のぶどう棚の下にベンチ、管理棟入口まで石畳みが続く。傍らにローズマリーが植えられ、管理棟の入口には一本の樅の木とミモザが仲良く並んでいた。

管理棟は曲屋風に建てられ、奥の部屋は農作業をする時の農具、台車が整理されてあった。その隣にテレビ室。大型の古いテレビは町の社会福祉協議会から贈られたものだ。その前に並べられた木製の椅子は、小学校でのお払い箱になったものだ。壊れているものもあるが、子ども達はその壊れたものも、器用に遊び道具の一つにしている。ホームにテレビはない。男児達は夕食後、宿題が終ると各々のホームか



ら一勢にテレビ室に集まって来る。人気はなんといっても歌番組だった。

管理等の隣の講堂はいつも扉が開いている。天気が悪い日は子ども達の遊び場になっていた。傷みが激しく、床板や壁板の釘が抜け、時々はがれる。園長がその都度工具を持参して修理する。講堂の傷みより、子ども達の怪我の方が心配であった。廊下へ出ると、今は使われていない礼拝堂へ続いているらせん階段だ。希望の園を訪れる人は、この白い礼拝堂の尖塔を目印に坂道をのぼってくる。

講堂と園長邸の間の奥の林は、高さが五〜六メートルもある数本の柿の木と栗の木があった。毎年、見事な実をつけて栗御飯やおやつとして食され、柿は日曜日になると職員と子ども達が総出で収穫し、焼酎で渋抜きをする。ダンボール箱にきちんと並べ、密閉し寝かせた後、冬場の子ども達のおやつや、正月料理のなますに利用される。

講堂での作業でもう一つあった。大樽に白菜を漬け込む作業は、中学高学年と高校生の出番である。何しろ、人の背丈ほどの大樽四つに、子ども達と職員のひと冬の白菜を作る。白菜を洗い塩を振る者、樽によじのぼり中で並べる者、と分担しなければならぬ。特に樽の中は、女、子どもでは出来ない力仕事だ。ここは大きい中学生、高校生の力を借りることとなる。

希望の園は五つのホームに分れていた。ホームは、互いに干渉しない距離を保っており、幼児から中学生まで平均十名の子ども達が、兄妹のように生活していた。

ホームを担当する職員で一番若い川上は、短大卒の二十一歳、職員というより、ホームの一番上の姉のような存在だ。

五つのホームの中で最年長は吉沢の二十七歳。中学教師の経験者で、本当の教育とは何か考えていた時、研究会で園長夫妻に出会い転身してきた。川上も吉沢も園長夫人と同郷の仙台の出身であった。麻子は東京生れだが、祖父母は登米市で農家である。他の二人は岩手と山形の出身で仙台市内の大学を卒業していた。

仙台の出身者が多いのは、園長夫人の信子先生の影響があった。信子先生の父親は、永く宮城県内の校長を勤め、教育長にもなった徳望家であった。兄、姉もまた教育者でクリスチャン。信子先生が大切にしている厚さ四〜五センチもある、黒い皮表紙の縁が少しすり切れた讚美歌集を見ると、信子先生も子どもの頃から教会に

通っていたことが分かる。

太平洋戦争が終わって数年後、東京の西部を流れる玉川上水で、愛人と共に入水自殺した人気作家がいた。作家の筆名は、彼が故郷の高校生であった時、高校の友人であった信子先生の父親の名前からヒントを得たものだ、と吉沢から聞いていた。信子先生の父親は仙台に戻り、作家は上京して次々と作品を発表。憂いを含んだマスクとその作品で一世を風靡したものの、戦後間もなく自らの生命を絶った。

作家である友人の死を、信子先生の父親はどんな思いで聞いたのだろうか。麻子は信子先生の分厚い讚美歌集を見るたびに、十代の頃の作家と信子先生の父親の友情を、思い出されるのだった。

職員会の開始二分前だ。信子先生がスリッパの音をパタパタさせて、園長室に駆け込んできた。直ぐ隅のオルガンを引き寄せ向きを整える。と、ブラウスの裾の洗濯バサミに気付き、そつとポケットにしまい黙祷した。園長と職員一同も開始を待つて目を閉じ、あるいは手を組み、部屋の中は静寂に包まれていた。

丸田が言った。

「職員会を始めます。信子先生、讚美歌二三九番お願いします」

「はい」

信子先生は急いであの分厚い讚美歌集の頁をめくった。他の者も遅れまじと頁をめくる。すぐに前奏を弾き出し、弾きながら全員が揃うのを待っている信子先生。

「二三九番、始めます」

オルガンの荘重な調べは、クリスチャンではない麻子にとっても心安らぐものである。彼女は、これが宗教歌であると特に意識せず、音楽として気に入っていた。大人や周囲の人間達から疎外され、心に深い傷を負って施設に入所してくる子ども達。不信感と言いやうない怒りや苛立ちは、施設での「大人達」である職員に向けられる。彼らは、愛情を求める一方で反発し、そして裏切ることも稀でない。

そのような子ども達と昼夜生活を共にし、一年の三六五日、家族同様に接している職員にとっては、挫折感と悲しみは常に身近にあった。自分自身の心の在り方を問い返すことを、強引に誘導してくれるのが職員会での讚美歌であった。

——さまよう人々、立ちかえりて——

歌いながらこれは自分のことだと思つてそつと周囲を見回した。川上の美しいソプラノが部屋の中に響いている。麻子は息を止め、耳を澄ました。ふと、丸田が目頭を押えているのに気付いた。整った美しい顔立ちの丸田、真珠のような涙が鼻筋にこぼれ落ちていた。

讚美歌は、いつも歌い止めをする二番を終えようとしていた。信子先生が丸田の様子に気遣つて言った。

「三番続けます」

何事もなかったように讚美歌が続いた。園長も気付いているのかいないのか、何も言わない。二三九番が終りに近付き、丸田も落ち着いたようだった。

「マタイによる福音書、第七章一節から六節まで、読みます」

丸田の朗読の間は皆も黙読し、最後に祈りを行い、アーメンを唱和した。

ホーム報告は吉沢から始まった。

「和也ですが、進路のことで迷っています」

和也は高校三年生。三年前の中学三年の時に、小六の弟、小三の妹と共に入所した。三人兄妹は珍らしく、別々にならず三人一緒に吉沢ホームで生活している。

「担任が大学進学を勧めてくれています」

「ほう」

目を細める園長、

「ところが本人が拒否しているのです。早く職に就きたい、弟や妹を引取りたい、長男だから面倒をみなければいけない。自衛隊はどうか、とパンフレットを持ってきました」

自衛隊、という言葉に緊張が走った。

「彼、学年で二番なんです。学年です」

吉沢は「学年」を強調した。

「学年ですか、優秀だなあ」

人ごとのように感心する園長、

「あの、昨年の二年生の時も報告しています。ずっと二番を維持して、えらいのです」  
集団生活は規則がある、消燈時間だ。短い時間でよく頑張っていると皆が口々に誉める。



「うん、それはまあ、ちょっと勉強時間を配慮してる。自衛隊ではなく、大学へ行かせたいのです」

吉沢は食い下がっている。

「そうかあ、このところ、屋根の修理に追われていたからなあ。なんせ、雨漏りの方が先決問題だからさ」

「すみません、雨漏りもうちのホームで」

と恐縮する吉沢。

「いやいや、すっかり忘れてすまんことで」

園長は少しおどけて返事をした。大学で心理学を専攻したという園長の言葉に、緊張していたその場が和らいだ。

「自衛隊なら技術を身に付けられ、給料も貰えるというのです」

園長は黙って机の上のパイプを手を取った。その口元はへ字に結ばれている。吉沢は、パイプを持ちかえる園長の手元を見つめていた。動きが止まるのを待っている様子だった。

「他人の世話を受け続けるのは屈辱だ、と彼は言うのです」

パイプの手入れをする園長の手元が一瞬止まった。

「担任は、推薦や奨学金の道もあると言って下さってます」

三人が入所したのは、彼らの父親が道路工事中の事故で死亡し、母親は夫の死後心の病いを患い、入院した病院で自殺。母親には遺産もあり、後見人に親族がなっていたが、いつの間にかその遺産も消えてしまっていた。

児童相談所は、父親や母親の親族に三人の子の養育の打診したが、引き取り手はなかった。入所してから今日まで、父方の伯父が一度面会に来ただけであった。

「本人と話をしてみましよう」

園長の言葉に、一同は安堵した。吉沢もほっとした様子であった。

ホーム報告は次の安達ホームになっていた。

「中学二年の考二です。最近の問題行動がめっきり減っています。起床した後、きちんと床をたたんでいますし、低学年の仁の世話もします。新しいクラスにも慣れてきたようです。どうやらですねえ……」

口ごもる安達に、何事かと皆の視線が集中。

「ええ、どうやら好きな女の子が出来たらしく、毎日とても元気です」

「なあーんだ、可愛い、考二くん」

と吉沢。園長も満面の笑みであった。

「いよいよお年頃かねえ」

それからゆつくりとパイプに火を付け、満足そうに吸った。紫煙の帯が室内に漂い始めた。

園長の姿は、どこか日本人離れしていると麻子は思っていた。整った面立ち。長髪の黒い髪は天然パーマで実になつていいる。その眼鏡の奥には、時々いたずらっぽいや眼差しがのぞく。しかし、ソファアに身を沈め何事か考えにふける姿は、外国のグラビア雑誌に載る作家のような雰囲気があった。

第一、あのだぶだぶのジーパン、あれは外国船の水兵達のスタイルではないか。園長は学生時代、神奈川の米軍基地でアルバイトをしていたらしい、と吉沢が言っていた。パイプだつてきつとその時の影響だろう。

麻子が港町の水兵達を想像していると川上に腕を突つかれた。腕時計を指している。

「幼児さん達のおやつ時間です。バナナをいただきます」

今朝、えーちゃんの父親からバナナを貰ったことは、園長や他職員に報告しておいた。

幼児五人分とお手伝いのおばさん・菊さんの分を取り分けて園長室を出た。

陽当りの良い講堂で幼児達は遊んでいた。職員会のある月曜日の園内保育は、職員が対応できないため菊さんの仕事だ。菊さんの膝には作りかけのお手玉があり、百合と美加子が菊さんに甘え、他の三人の男の子はボール遊びをしていた。お盆に麦茶の入ったやかんとコップが用意されていた。

「えーちゃんは来ていないのですか」

「そう、今日は見ないねえ」

菊さんは幼児さん達のおやつバナナの皮をむきながらも、一瞬アパートの方角を見ながら返事をした。アパートの入口付近に人影はなかった。

園長室に戻ると、丸田が最後のホーム報告をしていた。その後、司会者として会議を締めくくることになっていた。

突然、大きなスピーカー音が鳴り響いた。

「ピン、ポン、パン、ポーン、まいどお、おさわがせいたしましたーす。栗山町のみなさんこんにちわーっ。田中、田中商店のおー、移動販売車がーっ、やってまいりましたあー。みなさんのおいでをーっ、おまちしてまーす」

力強く、歯切れの良い若い男の声である。川上が笑みをもらし真剣に聞きほれていた。

田中は近所に住むトラック運転手だ。深夜阿武隈山地を越えて小名浜の魚市場に行き、仕入れた魚を郡山や福島のお店に納めている。栗山町へ戻って来る時は、魚類の他に、珍しい果物や食品、時には雑貨類もあった。

この町に移動販売車が来るのは田中が初めてだ。珍しさに加え、その車の派手さに人々は度肝を抜かれた。銀色のトランク型トラックの側面に赤や黄色、緑、青、ピンクの彩やかな色使いで花や蝶が描かれ、中央には大きく歌舞伎の助六が、かつ、と大きく目を見開いて、両手を広げて道を行く人を睨むように見おろしていた。

反対側の側面は打って変わって優しい絵柄であった。野山に桜が咲き、下方には猿や鹿うさぎのたわむれる図柄はまるで鳥獣戯画であり、上方はうさぎと亀のマラソンレースが描かれていた。

田中が来る以前、この町でもその周辺の市でも、東京に住んでいた麻子にとっても、これほど派手なトラックは見かけることはなかった。しかし地元の人々はむしろそれを楽しみ、歓迎している様子であった。

スピーカーから聞こえる若い男の声は、平凡な日常にどっぷり浸っている主婦達の前頭葉に、大いに刺激を与えたいらしい。そここの家角から現われて、連れだつて買物をし、楽しみに話をする主婦達の姿が多くなっていた。

スピーカー音がまた響いてきた。

「止めてえくれるなあー、おっ母あさんーっ、背中がいちようがあーっ、泣いているうー。おとこ東大いーっ、どこへいくうーっ」

園長室の一同は押し黙った。沈黙を破ったのは吉沢だった。

「さすが学生運動家、アジってますねー。でも痺れるーっていう感じかな」  
丸田がそれを制するように言った。

「午前の会議を終了します。何かある人は午後の会議でお願いします。午後一時から献立と行事予定の検討です」

一息ついたところで信子先生がお茶を配った。園長は湯呑みを片手に「背中のお兄さんは、東工大の学生だったそうだよ。結構うまいもんだねえ、浪曲も絵もさ」

園長は例の悪戯っぽい目を見せ笑った。へえ、園長もあのトラックを知っているのか。しかし麻子は笑えなかった。田中が唸った「止めてくれるなおっ母さん」は、東大紛争で学生達にコールされ広まったものだ。麻子は東京でごく身近にあったものだが、東北の地でも、同時代にある者の共感他人事ではなかった。

「あおう、彼は学生、だったのですか？」

川上が遠慮がちに尋ねた。

「どうだ かねえ」

園長はすました顔で答えた。

「東工大中退なんてもったいないなあ、前途あるのに」

吉沢は、和也のことを重ねているのだろう。

「この間、『こんにちは、せんせい』って、声をかけられたわ。『こんにちは』って返したただけだけど、礼儀正しい、清々しい感じだった。トラックより、学生の方が似合うと思う」

そうか、吉沢が声をかけられている。麻子も声をかけられたことがあった。

『こんにちは。この中にずっといるのですか、もったいないなあ』

吉沢と同じような言葉を使っていた。悪ぶっているように見えたので、麻子は頭を下げてそのまま通り過ぎたが、きちんと返事をしなかったことを後悔していた。

「今、東京は街中がデモ隊でひどいから。盾を持った機動隊や警官だらけ。東京駅では隊列を組んでいたのがホームに入れなかった。ジュラルミンの盾が並ぶと異様な。あの人もデモで怪我したらしいわ。お父さんと一緒に住んでいるみたいよ」

休みの度に東京に行く丸田は詳しい。珍しく能弁であった。

「そうなんですか。丸田先生も知っていたのですか」

川上が感心したようにつぶやいた。

スピーカー音がまた響いてきた。

「栗山町のみなさーん、ありがとうございましたあーっ」

田中の言葉が終ると再び音楽が流れた。

——これから始まる大レース、ひしめきあっていないなくわ、天下のサラブレッド四歳馬、今日はダービー めでないな……——

「あら、きょうは、帰ってきたヨッパライグじゃないのね」

「きょうは、おっ母さん」も聞いたし、元気が出るわ」

「感謝、感謝」

一同は笑顔で園長室を後にした。

### 三、女達の争い

午後は、コーヒーを飲みながらリラックスした会議である。子ども達から開放されて久しぶりに女性だけの会話が出来るひとときであった。

両手をあげ、のびをする笑顔の川上。信子先生はバタークッキーの箱を開けながら、

「遠慮なく食べて、免疫つけて下さいよ。コーヒーは丸田さんの東京土産です」

「丸田さんならキリマンジャロね、どうりで東京の香りがすると思った」

と吉沢。外国文学の好きな川上が言った。

「そういえば『キリマンジャロの雪』という小説ありましたよね」

「それぞれ『キリマンジャロの峰のいただきに一匹のひょうの死骸があった』丸田さんへミングウェイのファンだから」

丸田は曖昧な返事をした。麻子はクリスチャンの丸田がへミングウェイのファンというのに驚いて、同じクリスチャンの信子先生を見ると、信子先生は怪訝な表情で周囲を見回していた。

「静かに！ 聞こえない？」

一同は耳を澄ました。——ギャーッ——、と叫び声が聞えた。



「どい、誰？」

信子先生は素早く立ち上り身を翻し、園長室を飛び出て行った。吉沢も後を追いかけてようとした時、窓から外を見ていた川上が叫んだ。

「けんかです。幼児さん達じゃありません。女の人ですよ、えーちゃんのお母さん？ 地面に転んでいます」

会議資料を準備し始めた職員達は、驚いて顔を見合せた。麻子も観音開きの窓から身を乗り出し、川上の指差す方角を見た。

希望の園と隣の農家の境に、一本の山桜の大樹があり、遅咲きの桜も今や満開を迎えようとしていた。その二十メートル程先の路上で、中年の女が二人、取っ組みあいの最中であつた。叫び声は路上に倒れているえーちゃんの母親の悲鳴であつた。いつもは結いあげられた黒髪はほどけて肩や背中へと流れていた。地面に着くほどの豊かさであつた。乱れた黒髪は十二単の女の髪のようになまめかしく、麻子は遠目ながらもえーちゃんの母親の別な一面を覗き見た思ひであつた。

もう一人の女はパーマである。和服姿であるにもかかわらず攻撃の手を休めない。相手の髪の一房を握りしめている。この町では見かけない奥様風の女であつた。

職員達の目の前を信子先生が走って行く。奥様風の女は信子先生には目もくれず、母親の着物の衿を引っぱつた。母親の胸元がはだけた。それから女は、ゆっくりと右手を振り上げていく。今度は信子先生が悲鳴をあげた。女の右手に、鈍く光るハサミが握られているのが麻子達にもわかつた。川上も麻子も声を失つた。

その時、二つの黒い影が横切つた。一つは田中で、もう一つは見知らぬ中年の男だつた。

田中はハサミの女の腰をめがけ体当りした。女が倒れ、地上に落ちたハサミを田中が素早く奪い取って、上方にある畑の中に投げた。中年の男はえーちゃんの母親を助け起こすと何やらつぶやいている女を一喝した。

「いい加減にしろ！」

男の野太く嗄れ声があたりを制した。女は男をにらみつけ、ふん、というように顔をそむけた。

椅子に座って、ひとりコーヒーを飲んでいた丸田が静かに声をかけた。

「会議を始めましょうか」

我を取り戻して、各々は席に戻った。しかし誰もが女達の争いを理解出来ずにいた。程なく信子先生が戻ってきた。

「なんとか落ち着かせ、あちらの人は田中さんが送っていききました。あの二人が来てくれて助かりました。田中さんのお父さんですって」

信子先生はほっとした表情を見せていたが、川上はうつむいたままであった。

「始める前に少し歌いましょう、讚美歌五一六番はどうでしょう」

オルガンに向かい、弾き始める信子先生。沈んでいた空気が少し明るくなった。皆は姿勢を正し、歌い始めた。母親の子どもに対する想いを歌った讚美歌五一六番は、一度で覚えてしまうほど、心になじむ美しい曲だった。

しかし、川上の美しいソプラノが聞えない。川上は泣いていた。涙しながら途切れ途切れに歌っていた。代って、いつも職員達を引き立て控えめな信子先生のアルトが、緊張した若い女性達の心を和らげるように優しく響いていた。

#### 四、桜の木の下で

次の日は川上の公休日であった。職員の公休日はホームリーダーの年長の子に任せるが、幼児のいるホームは負担がある。麻子にはそのような時の代替職員の務めがあった。子ども達の生活を知る絶好の機会なので、喜んで出かけている。

川上ホームの人員構成は五つのホームの中で一番少なかった。女兒は三歳の百合と小五のまり子。男児が小一の順一、小三の健、小五の典男、小六の高久、中一の哲夫、中三の次郎である。昨年短大を卒業したばかりで、経験の少ない川上の負担を考慮されている。

ホームに行くと、百合の就寝の準備を小五のまり子が手伝っていた。まり子はよく気がつき、川上の手伝いにも不平を言うことなく率直であった。

「まりちゃんは素適なお母さんになるね」

まり子は嬉しそうにはにかんでいる。居間では小一の順一がもじもじしていた。

「あのねえ、あのねえ……」

「なあに、宿題かな」

子ども達の夕食後の最大の関門は宿題だ。テレビ室から戻ってきた典男と一緒に机に座らせた。しかし二人は、麻子がまり子達の様子を見に席をはずすと、遊び始めていた。

「こらっ、順ちゃんは宿題があるのよ」

「うそだーい、終わってるよ、まりちゃんがみてたもん」

あわててノートを開くと確かに終わっていた。

「やーい、だまされた、だまされた」

はやしたてる典男。笑っているのか、ベそをかいているのか、もじもじする順一。

「ごめんね順ちゃん、ちゃんと聞けばよかったね。順ちゃんも言いたいこと、はっきり言ってるね」

「うん」

やはりもじもじした態度で頷く順一。本当は何を要求していたのか見抜けなかった麻子に落度がある。六歳の順一は、〇歳児で乳児院に預けられた。実母はその後一度も会いに来てない。親の無償の愛を全く受けていない彼は、どのように表わすべきかを知らない。言葉にならない「もじもじした態度」が彼なりの愛情要求なのであると、麻子は始めて理解した。

いづれ希望の園を卒業して行く順一、良き伴侶を見つけるまで天涯孤独である。体得しておかねばならないのは、何があっても強く生きる力である。平凡な日常を倦むことなく歩む強さであり、生活技術でもある。他者と自分の関係を見極め、意思を明確に表現できるようになれば、普通の生活を、ごく当り前に送ることができるようになる。施設の子は、鳥でいえば木の室で成長する啄木鳥ではなく、樹木のとっぺんで、風雨にさらされながら巣立つ鷹の子だから。

麻子は順一を抱いた。順一は無邪気な笑顔で意味なく麻子を叩いた。――痛い――と言っても、なおも叩き続ける。叩きながらベそをかいている。麻子は順一を強く抱きしめた。

「甘えんぼさんは誰だ。甘えんぼさんはこの子、この子は順ちゃん」

順一は麻子の豊かな胸に顔を寄せると、次第に静かになった。柔らかな乳房の奥の鼓動を、少しも聞きもらすまいとしている。

麻子が、体全体を揺すと順一は麻子を見上げにっこりした。

「聞えたよーっ、ドクツドクツて言ってた」

それからぱっと麻子から離れた。照れくさそうにセーターの裾をまくりあげ、顔を隠した。典男もやってきて、順一と同じように両手でセーターの裾をまくりあげた。二人はへそ出し人形のような恰好になって、身体を左右に振りながら自分達の部屋に戻って行った。

麻子が川上ホームの仕事を終え、事務室に戻ったのは八時前であった。途中管理棟奥のテレビ室を覗くと、狭いテレビ室は満員御礼で熱気にあふれていた。早々にテレビ室を後にして事務室に戻った。昼間、中途にした帳簿を確認して、残りは明日の仕事にまわすことにした。

外に子ども達の声が聞え、駆けていく足音が続く。歌番組が終わり皆ホームへ戻る。麻子も急いで帰り仕度をして外に出た。今日のテレビ室当番の明夫がやってきた。明夫は暗闇に立つ麻子に驚いて立ち止まった。

「なんでえ、びっくりするばい。麻子先生だっばい」

怒ったような口調だった。

「そう麻子先生だ。ごめん驚かしちゃった」

「ちい！」

「テレビ終わったのね」

「んだ、終りだっばい」

「誰もいないね」

「いねえ、本当だあ」

「そうかい、ありがとう、おやすみなさい」

「おやすみーっ」

明夫は歩き出し、歌い始めていた。

——いきてる かぎりは どこまでも さがしつづけるこいねぐら きずつきよ  
ごれた わたしでも ほねまで ほねまで ほねまで あいしてほしいのよー

歌番組の通りの曲であったのだろう。歌うというよりは、まるで吠えるような歌

声が誰もいない中庭に響いている。明夫は、気分良さそうに、肩をいからせてホームへ帰って行った。

町から希望の園に通じる道に、いつの間にか砂利が敷かれていた。近いうちにアスファルト工事が始まるということだ。麻子の借りているアパートは、昨日女達の争いがあった場所から、更に三十メートル程先の高台にあった。夜になると、家は門燈を消して就寝する。都会育ちの麻子には、まっ暗な夜道は苦手であった。そこに最近、あの桜の大樹にブリキの傘をかぶった裸電球が点された。有難かった。桜は道路を覆うほど枝が伸び、昼間は周囲の風景に溶け込みのどかであったが、夜は、裸電球の明かりで幻想的な雰囲気を漂わせていた。

麻子はいつの間にか明夫が歌っていた歌を口ずさんでいた。少し歩いたところで、桜の大樹よりはるか先の藪の中に動くものがあるのに気付いた。目を凝らすとそれは少しずつ大きくなって来る。男だった。

この時間、道のどんづまりにある希望の園に来る訪問客はない。出会うとすれば、アパートの前からの脇道を桑畑に向う農道を使う近所の住人だ。だが気になる。住民達ならばこれほど不安を感じる事が無い。何故だろう。麻子は歩きながら前方を見つめる。

麻子は、男が見覚えのある作業服姿であるのに気付いた。えーちゃんの父親だ。ならば恐れることはない。バナナのお礼を言わなければならない。しかし、それはすぐ飛んで行ってしまった。麻子に向って歩いてくる男はえーちゃんの父親とは別人になっていた。今にも掴みかかってきそうな気迫で姿は大きくなっている。恐しくなった。えーちゃんの父親ではないか、そうなのよ、と自分に言い聞かせる。男が不敵な笑いを浮べているように思える。わたしが歌っていたから？　そうよ、きつとそうよ、だから何んでもない、と言い知れぬ恐怖を否定し続ける。

男の姿は得体の知れない魔物のように闇の中で膨れあがり、そして小さくなる。変幻自在に動きまわり迫って来る。麻子の動きを少しでも見逃すまいとしているようであった。足が竦んで何度も止まりかけた。まわれ右をして、一目散に希望の園に駆け戻りたい思いであった。

だが、ここで突然後戻りをして駆け出したら男が追って来るのではないか。追



つかれたらどうなる。片側は土手、反対側は畑と植え込み。周囲は闇である。殺される？ 麻子の背筋に冷たいものが走った。

相手はえーちゃんの父親ではないか、そうなのだと、何度も是認する。しかしその度に恐怖が押しよせる。両者は錯綜し、男との距離は次第に狭められていった。足がもつれる。麻子は決心した。このまま歩き続けよう。闇の中に充満している魔物に負けてはならない。視線が合うのは避け、出来るだけ平静に、平静に歩こう。

二人の距離が刻々と狭まり、あの桜の大樹に近づいていた。ふと、麻子の耳から足音が消えた。一切の音が消えた。無音の世界。まるで夢の中を浮遊する繰り足の人形のように、一步一步近づいてゆく。男の姿が眼前に迫り、満開の桜の大樹の下で交叉した。

魔の世界に疾風が吹き込み二人を包んだ。桜の花びらが舞いあがり、風にもまれて闇に散った。男の頭上に、顔に、肩に、と舞い散ってゆく。その姿はスローモーションの画像の中に溶け込んで幾重にも回転している。麻子を見つめる男の顔は、大きく目を見開き、憤怒の形相をした六道絵の阿修羅であった。

花びらと共に、阿修羅が覆いかぶさるように麻子に挑みかかった。思わず両手で空を舞う花びらと阿修羅を払いのけると、阿修羅が麻子を睨み返した。それから声にならない叫び声を残して闇に消えていった。

どの位たつたろうか。麻子の耳に男の砂利を踏む足音が響き、やがて小さくなって消えていった。麻子も昼間二人の女が争っていた場所を過ぎると、ようやく自分の足音が耳に入ってきた。その途端、麻子は脱兎の如く駆け出した。角を曲ると坂道をのぼり、石段を二段とびして駆けあがった。アパートの扉の中にすべり込むと急いでドアを閉めた。

息を弾せながらじっと耳を澄ますと、隣室のラジオから民謡が聞えてくる。いつもの民謡の時間だ。ようやく人心地のついた麻子は、大きく深呼吸をした。

——これは何？ 一体何んなの？ こんな恐しいことなんで？ きつと幻覚よね。そうよ幻覚なのよ——

自問自答しながら水道をひねる。蛇口から水が勢いよく流れ、下に置いたやかんから溢れ出ていく。冷たい水で顔を洗った。

——大丈夫、いつもと同じだ。ちょっと疲れているのだ。それで神経が過敏になった。早く休もう。明日になれば、またいつもの明るい朝がくる。さっきのことは何んでもなかったことになる—— 蛇口を締め、麻子は自分に言いきかせた。

## 五、どんど焼

数日たった。事務室で朝刊を読んでいた吉沢が声をあげた。

「栗山町大別甲の東二番地って どこ？」

「ここは東一番地です」

「わかってる。二番地よ、前のアパートのこと？」

吉沢は朝刊を麻子に差し出した。『保険金殺人事件』という大きな見出しが飛びこんできた。

「これってアパートの住人ということ？ 誰が住んでいるの、えーちゃんの父親の他に……」

そう言うってから二人は沈黙した。えーちゃんの両親の名前は知らなかった。しかし、容疑者の住所や年齢はほぼ合致している。他に一階に住人はいなかったのだ。

麻子の脳裏に、数日前の夜道の出来事が蘇った。職員達同士で日々の個人的な出来事をあれこれ話すことはなかった。子ども達との生活に追われる毎日なのである。麻子も、えーちゃんの父親に誤解が生じることを恐れ、誰にも話をしていなかったが、しかし、会ったことは真実だった。記事が本当なら、あの日逃亡し、夜陰に乗じて妻子に会いに来たところだったのか。

「知人に伴われ自首したそうよ。田畑の売却が殺人の動機とあるけど、そんな単純なものではないでしょう」

吉沢はため息をつきながら、開いていた窓をそっと閉めた。

「あの人は愛人さんなんですって」

「あいじん？」

「そう、愛人、二号さんともいう。この間の争った女性が正妻さんですって」  
麻子の頭は混乱し、冷たくなったコーヒーを一気に飲み干した。

「えーちゃんは五歳位かな。あの子の発達の遅れ、親として心配でしようねえ」

吉沢の言葉は麻子の胸を衝いた。そうか、父親はそれでバナナを持って来たのか。バナナを受取ったのは私だ、責任がある。と麻子は思った。

「夫婦って何かしら、家族ってどういうの。だれが何をすれば良かったの」

吉沢の目が潤んでいる。その目が事務室の戸口を見つめて止まった。戸口に蒼白な顔色の川上が立っていた。

「私も愛人の子、二号の子です」

吉沢も麻子も絶句した。

「だからといって、子が責められる理由はありません」

川上はそれだけ言うと、入口の戸を閉めた。

吉沢は慌てて戸を開け、川上の後を追った。麻子はいたたまれず、やりかけの帳簿を閉じた。——神様、バナナはとくに畑の肥やしになってしまいました。どうぞ、みんなをお守り下さい。アーメン——。麻子は真剣に祈っていた。

えーちゃんの父親の容疑は、証拠物件の長靴が見つかり確定した。アパートの東側の屋根上で発見されたと、菊さんが教えてくれた。

「なんだろうねえ、わざわざ見てくんねせ、といわんばかりじゃないかねえ」と、やりきれない表情を浮べた。

日曜日、麻子の公休日である。シーツのような大きなものはアパートでは干せないで、屋上の物干し場を借りている。午後になって洗濯物の取り込みに行くと、まり子がホームの洗濯物を取り込んでいた。

「まりちゃん、お手伝いありがとう」

振り返ったまり子の手元に、くしゃくしゃに丸めたシャツがあった。籠の中にも運動着の上下がまるめてある。

麻子は取り出して手でしわを伸ばした。それから自分の膝の上で器用にたたみ、パンパンと叩いてきちんと籠に入れ直すと、まり子がつこりと笑顔をみせた。

「これでアイロンをかけなくても大丈夫」

「うん」

まり子は素直に頷き、次に取り込んだ衣類をたたみ始めた。——そう、まりちゃ

んだけではない。みんな生活技術のすべがわからないから、それが出来ないだけなのよね——麻子は気分が良くなり鼻唄まじりで洗濯物を取り入れ始めた。

「あさこせんせい、あれ」

まり子が背後の畑の方角を指差した。東側の休耕田で焚火をしている七、八人の男達がいた。全員が二十代の学生風の男達である。若い男達の集団をこうして見ることは珍らしいことだ。彼らは、田中の家からダンボールの箱を運んでは、次々と焚火の中に投げ入れていく。箱ごと投げ込む者もあれば、中から本を取り出して確かめている者もいる。ダンボールの中は、書籍類や紙の束のようであった。

その中で田中は腕を組み、燃えさかる炎をじっと見つめていた。そういえばあの日以来、田中のトラックを見かけなくなっていた。

男達は全員が白いワイシャツやTシャツ、黒いズボンやジーパン、ジャンパー姿である。彼らは田中の『止めてくれるな、おっ母さん』の仲間達であろう、と麻子は思った。

投げ込まれたダンボールの箱は火の塊となり、火柱のように空へと昇ってゆく。くすぶっている煙も周囲の煩惱をひっそらい、火粉を巻きこんですべてを焼き尽くす勢いであった。麻子は思わず声をあげそうになった。田中のいる休耕田は、えーちゃん母子の住むアパートの南東にあった。アパートは田中の家からも、買物をする幾人かの主婦達の家からも見える位置にあった。アパートの屋根上の長靴を誰かしら見ているも不思議でなかったはずだ。

その時田中が振りかえり、屋上にいる麻子を見た。二人の視線が合った。田中は、麻子の心の中を見透かすようにじっと見つめている。実際はほんの数秒の出来事だったかもしれない。しかし彼女にとっては、時が永遠に止まったかのように感じられた。

田中はゆっくりと視線を戻すと、傍らのダンボール箱を引き寄せ、中から本を取り出すと書名を確かめた。頁をめくり、やがて思いきるかのように両手で閉じると、火の中に投げ入れた。火の粉が散った。火柱は再び燃えさかり、勢いをつけて上空へと昇ってゆく。

食堂からオルガンが響いてきた。弾いているのは川上だった。誕生日会で女の子達が歌う曲の伴奏を頼まれ、練習をしているのだ。風に乗れば、彼女が好意を寄せる田中のもとにも届くはずだ。まり子が

「どんど焼きみたいだね」

「そうだね、お兄さん達のととても大切などんど焼き、なのでしょ」

「ふうん」

「せんせいも同じかな」

へえ？ という表情のまり子。——まりちゃん、今はまだわからなくてもいいのよ。いつかわかる時が来るからね—— 麻子は心の中で呟いていた。

取り込んだ洗濯物を持って門を出ると、引越の荷物を積んだトラックが停っていた。何気なく助手席を見ると女が振りむいた。えーちゃんの母親だった。

「あ・り・が・と・う・ご・ぜ・い・や・し・た」

母親と話すのは始めて、その言葉に息を飲んだ。言葉は土地のなまりというより、明らかに言語に障害を持つ人の言葉であった。

喉の奥から言葉を絞り出すようにして礼を言う。その両親から大粒の涙がこぼれ落ち、彼女の両腕の中ではえーちゃんが無邪気に笑っていた。

トラックが走り出すと母親は頭を下げた。その髪は短くカットされ、後で簡単に結んでいる。虚を突かれた麻子は、走り出したトラックに向って、深く頭を下げるのが精一杯であった。

トラックはあの桜の大樹の下を走り抜け、住宅の角を曲って去って行った。麻子は我を取り戻し、一家の住んでいたアパートに向って再び深く頭を下げた。

それから洗濯物をかかえ直し、トラックの去った道をゆっくりと歩き出した。

——完——